個性溢れる明るい未来へ

伊勢原市立伊勢原中学校
三年　井上　柑凪（いのうえ　かんな）

「福祉」のことについて考えるとき私は「障がい」というワードが付きものになると考えていた。そして障がい者だからと言って、差別をしてはいけない。私は強くそう思っていた。そんな私は障がいというハンディキャップを背負いながらも懸命に生きていることは凄いことであり、そんな人たちがどうしたらより良く過ごすことができるのか考えた。

私が小さかったとき、両親の仕事柄上色々な人と関わることが多かった。保育園や小学校が休みの日など、両親が仕事をしている横で色々な人とお話しをしたり、ときには一緒に遊んでもらったりしていた。そんなふうに色々な人と関わっていく中で、障がいのある人とも関わっていたことを思い出した。その人と初めて会ったときは、最初他の人とは少し雰囲気が違って少し怖かった。でも、少し

時間がたてば他の人と同じように普通に接していた。そしてその人は他の人よりもじぶから一緒に楽しんでくれるし、少し良いこととしたら他の人よりも感謝してくれて、凄くまっすぐな人で小さかった私には一緒にいて凄く楽しくもあり、居心地が良かった。昔のことを思い出していくなかで私はあることに気が付いた。それは、無意識のうちに自分自身が障がいがある人に対して差別をしてしまっていたということだ。小さいころの自分は障がいがあっても無くても、一人の人として対等に何も気にせず接していた。しかし成長していくにつれて、障がいという言葉にとらわれてしまい、大変だとか何か特別なことをした方がいいのかなど、そんなことを考えてしまう自分がいた。小さなころは一人の人として対等に接することができていたのにも関わらず、成長していくにつれて障がいという枠で一線を画し、どこか違う人として見てしまっていたのだ。だから私は、これから障がいと

20×20

いう枠をすて、色々な個性をもつ人同士がどうすれば幸せに過ごすことができるのか考えていこうと思う。

世の中には、人と違うところや失敗を笑う人がいる。良いところや成功した部分より悪いところばかりに目がいってしまうのかもしれない。だから個性を出すことが怖かったり、人を頼ることが恥ずかしいと思う人がでてくる。それでも私は、どんな過去も未来をよりよくするための土台になると思う。だから他の人の目を気にして自分を表に出せない人も、勇気を出して一歩踏みだしてみてほしい。そうすれば個性を認めてくれる人がいるかもしれない。自分を認めてくれる人がいれば、それが土台となり、誰かを認めてあげる未来がまっていると思う。何か大きなことをやってあげなくてもいい。ただ寄り添ってあげることが相手の助けになるかもしれない。全てではなく、苦手なほんの一部を手伝ってあげればいい。そんなふうに、小さな優しさが積み

20×20

重なって心が豊かになっていくと思う。

人は寂しいからこそ身近にあるものを大切にする。人はそんなに強い生き物ではないからこそ支え合う。完璧な人なんていない。だから頼って当たり前なのだ。頼ることは決して恥ずかしいことではない。人は頼り、支え合いながら生きていく。だからこそ、誰かの良いところや成功に自然と目を向けることが当たり前の社会になってほしい。そうすれば個性を表に出すことや、頼ることが恥ではない誰もが生きやすい社会ができていくと思う。

人の個性に当たり前はない。みんな違う。違うからこそいい。誰もが個性で満ち溢れ、いつだって前を向いて、自信を持って歩ける未来を私は望んでいる。

20×20